巻頭言

世界で存在感ある「科学技術創造立国」へ

日本科学未来館館長・宇宙飛行士
毛利 衛

このところ、日本の行く末を悲観する声を聞くことがあるが、悲観する必要はまったくない。今、日本は科学技術に関してはとても良い状態にある。また、日本社会の豊かさ、文化の高さなどはアジアの中で尊敬されている。こうした優位性はこれからも、より伸ばしていかなければならない。そのために何が必要だろうか。

幾つか例を挙げながら、分析してみたい。

まず「日本人留学生の減少、内向き志向」が言われるが、海外から日本への留学生はむしろ増加している。若者は良いものに対して非常に敏感だ。科学技術では、他国で学ぶより、日本のトップレベルの大学の教授につき、研さんを深めた方が高度な研究ができる、と認識されているということだ。日本が敗戦後のショックから立ち直り、高度経済成長を迎えた頃は、日本人学生がアメリカや欧州などに行き、そこで学ぶことが意義を持っていたが、今はそうした先輩たちの苦労が実を結びつつあり、むしろ、日本の大学における研究環境が整ってきている。

次に、「技術移転などにより、日本が中国に追い抜かれてしまう」「宇宙分野で、日本は中国に抜かれた」という議論がある。科学技術分野は常に国際競争にさらされているが、これについては、他国よりも先を行く、ユニークな研究に取り組み続けることが大切だ。他国からある技術などを真似される頃には、次の新しい試みに向けてチャレンジをしていけば問題はない。そこで優位性を確保することができる。

また、科学技術の発展においては、競争関係だけでなく協力関係も大事である。私が館長を務める日本科学未来館は、ユニークな先端の科学技術を扱っており、こうした科学館は世界にも

あまりない。私たちが中心となって、まずはアジア地域のレベルを上げていくことが必要だと考えており、実際に中国などの科学博物館と提携を結んでいるが、こうした取り組みは、日本の義務であり、貢献だと考えている。

日本の国力を支えているのは、科学技術の力であることは間違いがない。そのために必要なことは、何よりもまず、人材の育成である。このところの成果主義を重く見る傾向から、研究志向が強くなっており、研究自体は発展しているが、次の世代を担う研究者の人材育成の観点がとぼしい。また、競争的資金獲得のため、短期で成果を上げようと、教育より論文を書く方に忙しい研究者が増えてきた。さらには、大型の研究費がつくプロジェクトなどでは、ポストドクターなどの若手研究者が使い捨てられているような現場もあると聞く。人材を育てて「つなげていく」という発想を、研究費の要件として入れるなど、人材を育成することをシステム的に検討することが必要だろう。

次に「尊敬される日本」であり続けるために、どうあるべきか。ここでも人材育成が課題である。日本の良さの本質とは、国民の勤勉さと知識量、あるいは読解力などではないか。国際的な学力調査の結果で順位が少し上がったとか下がったとかいったことに、一喜一憂する必要はない。世界の標準で測れるものだけで競争していたら、日本のユニークさはなくなってしまう。

それよりも、相手を思いやる心とか、日本語できちんと古典などを読み解くことができる力などが必要だろう。日本人らしさによって、アジアの国々から「日本に行きたい。日本で勉強したい」という人が多くなるような日本をこれから造らなければならないだろう。

しかし、経済競争や研究者の競争は依然としてあり、それは厳しいものである。科学技術分野では、やはり勝ち、世界一を取らなければならない。そのためにも、日本にはこれまでの積み上げがあるので、そこにさらに積み上げていくことができる若者を育てていくという任務が私たちにはある。

最後に、日本の技術は世界に貢献できるということに触れておきたい。環境問題に関して、世界がこれから挑戦しようというレベルに日本はすでに達している。他国が日本をただまねするだけで、CO_2の発生量が減少するというデータもある。今日本にある技術を、「日本」という国がはっきり見える形でアピールしていくことも、これからの課題である。

毛利 衛
もうり まもる

1948 年北海道生まれ。北海道大学助教授を経て、宇宙飛行士となる。1992 年米スペースシャトルに日本人として初搭乗するなど、宇宙飛行を2度体験。2000 年日本科学未来館館長に就任。新日中友好 21 世紀委員会委員。